

文教厚生常任委員会行政視察概要

令和 5 年 7 月 3 1 日（月）
於 豊 橋 市 議 会
午後 1 時 2 1 分 ～ 午後 3 時

1 調査概要

「のびるん de スクールについて」

豊橋市教育委員会 生涯学習課 放課後教育推進グループ

のびるん de スクール（以下、のびるん）は、「大人及び子供同士の交流による健全な育成、社会性の向上」と「多様な体験活動による子供たちの能力発掘、得意の発見、苦手の脱却」を目的に、授業にない体験活動や専門家による教室、企業などによる出前講座を行うものである。子供たちの放課後の時間の過ごし方や体力づくりのための放課後の新たな学びの場として、令和 2 年度の 2 校から始まり、3 年度に 1 2 校、4 年度からは市内 5 2 校全校で実施している。

実施のきっかけは、令和 3 年度から市立小学校の全ての運動・文化の部活動が廃止となったことである。これは、部活動の顧問を務める小学校教員の負担を軽減し、授業の準備時間や児童からの相談の機会の増やすことが目的としている。

のびるんは、全ての小学校区で同じ内容を体験でき、スポーツ（体幹トレーニング・ダンス・トランポリンなど）、カルチャー（音楽教室・絵画・演劇など）、アカデミー（英会話・プログラミング・ラジオパーソナリティによる話し方講座など）がある。



実施場所は、児童の安全性を考慮し運動場、体育館、空き教室などの学校施設とし、対象者は、小学 1 年生から 6 年生までの希望する全児童、開設日は、週 2 ～ 3 日、活動時間は、放課後から午後 5 時まで、下校方法は、保護者迎え、児童クラブ利用、自力下校のいずれかを選択する。利用料金は、児童 1 人 1 回につき 3 0 0 円としている

(児童クラブの利用者は原則無料)。

2 主な質疑応答

問 運営費用について

答 令和5年度の予算額は、2億4722万9千円である。財源は、市の一般会計、文部科学省の補助金、保護者利用料金である。主な支出は、指導員リーダーや体験活動の講師らへの報酬などである。

問 運営に要する人員体制について

答 全体で約600名のスタッフが活動しており、そのうちの約1割が教員OBである。

1 小学校につき、1名の指導員リーダー（アルバイト職員）、学校規模に応じた1名～7名のサブリーダー（アルバイト職員）、サポーター（シルバー人材センター）、体験活動の講師を配置している。また、放課後コーディネーター・エリアマネージャー（教員OB）が各小学校を巡回したり、小学校とのパイプ役として情報共有を行ったりしている。

特別な支援を要する児童への接し方などについての研修を行い、スタッフの質の向上を図っている。

なお、教職員は、顧問、講師、見守りといった役割で参加しておらず、部活動廃止の意図が損なわれないようにしている。

問 体験活動の講師などをどのように募集しているか。

答 講師依頼や企業への連携依頼については、モデル校として実施した2校から波及していき、参加する企業や団体、ボランティア、習い事教室の方など、人づてで多くの地域の方に協力をいただいている。

問 児童・保護者の反応について

答 令和4年度に実施したアンケートによると、参加者のうち、72%が満足、普通が24%、不満足が4%であった。

令和5年度登録及び検討の予定者98%であり、参加した利用者は、満足度が高く、継続利用につながっていると考えている。

問 事業の継続に当たり改善した点について

答 アンケートでは、「電子申請が難しい」「保険料がネック」「趣旨が分かりにくい」「自分の時間を過ごしたい」といった声があった。

そのため、保護者の負担を軽減し、のびるん参加へのハードルを下げることを狙って、令和5年度に、利用登録・変更連絡などで使用している電子申請システムを刷新したほか、保険料を無料化した。加えて、あらゆる広報媒体によるPR、学校からの発信を強化し、事業の周知及び趣旨の理解促進に努めている。

問 成果と今後について

答 これまでは、子供については、小学校区単位での捉え方が主であったが、市内全域で同じ体験活動が行われるようになったことから、全ての子供を地域全体で支える大人の輪が広がったと考えている。

保護者アンケートから、「のびるんのおかげで親子の会話が増えた」「いつも子供から体験活動の報告があって嬉しい」「迎えの帰りにのびるんの話を聞くのが楽しみ」といった声があり、親子の交流が深まったと考える。

のびるんをきっかけに、児童本人が勉強をさらに進めたり、不登校の児童が登校するようになったりした場面も見受けられた。

今後は、のびるん（放課後子供教室推進事業：文部科学省所管）と放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業：こども家庭庁所管）という垣根を超えた、放課後における全児童一体・連携をさらに進めていきたい。

以上